

6-3					
主 題		在宅での看取りにおける介護支援専門員の役割			
副 題		遺族の話を聞き、地域の多職種で看取りの事例を振り返る			
キーワード 1	看取り	キーワード 2	介護支援専門員	研究(実践)期間	7ヶ月
法人名・事業所名		(株)やさしい手 やさしい手中野居宅介護支援事業所			
発表者(職種)		高見澄子(管理者兼主任介護支援専門員)			
共同研究(実践)者		なし			
電 話		03-5318-3877	FAX	03-5318-6933	
事業所紹介		平成 11 年に中野区に開設した居宅介護支援事業所で、訪問介護事業所を併設しています。男性 1 名、女性 4 名の計 5 名の介護支援専門員が在籍し、経験年数も 2 ヶ月～10 年と様々です。「住み慣れた家で安心して老いる」その想いを実現するために、地域に根付いた事業所となることを目指して日々活動しています。			

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

在宅における看取りの相談は増加しており、その重要性が増す事が予想される。しかし、在宅における看取りを阻む幾つかの要因があり、利用者・家族、及びケアチーム共に満足感を覚える看取りを困難にしている。今回経験したケースを通じて在宅終末期ケアの問題点を探ってみる。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

多くの利用者は自宅で亡くなりたいと思っている。しかし、残念ながらそれらを阻む要因がいくつかある。この要因についてケアチームで振り返りを行い、遺族の想いを聞き取り共有することで、在宅での看取りにおける介護支援専門員の役割や課題が明確になる。

また、振り返った結果を事業所内に留まらず、地域のケース検討会等で共有することが、地域の介護支援専門員の資質の向上に繋がることを期待する。

《3. 具体的な取り組みの内容》

ここで、最近経験した看取りのケースを紹介する。このケースを通じて、在宅での看取りがなぜ難しいのか、問題点を明らかにする。

① 対象者 58歳、女性、悪性神経鞘腫、夫と息と3人暮らし

痛みががはじめ日常生活に介助が必要になり、サービスの利用を検討するために相談がある。主婦としての役割を果たすことが困難となり、家族3人の生活が大きく変化した。病気が進行するにつれ妄想が出現。不安から昼夜問わず家族を呼び続け、家族は疲弊し、在宅での看取りを諦めようと考えたこともあった。しかし「家で最期を迎えたい」という本人の希望を叶えたいという家族の強い思いで辛い時期を乗り越え、在宅で看取ることができたケース。

② 取り組みの具体的な手法と手順

- ・看取りが行われた後、A さんの夫から、在宅での看取りについての想いや意見を聞き取る。
- ・地域のケース検討会に事例を提出し、ケアチームメンバーと地域の主任介護支援専門員等が集い、A さんの夫の想いを共有し振り返りや意見交換を行う。ケース検討会に参加できないケアチームメンバーからは、事前に意見や感想を聞き取りケース検討会に挑んだ。

《4. 取り組みの結果》

A さんの夫から、看取りの感想聞いたところ、「やり切った感がある」など自宅で看取って良かったと言う気持ちが強かったが、「こういう症状が出ますよと予め聞いていたら、心構えができて慌てずにいられたと思う」など、課題も見えてきた。

- ・在宅でのよい看取りを阻む要因

①告知における問題点 ②死の概念のとらえ方の問題点 ③本人における ④家族における問題点 ⑤コミュニケーションの不足 ⑥家族関係、家族の介護力の不足 ⑦療養環境についての問題点 ⑧医療者・看護師・介護との関係 ⑨不十分な緩和ケア ⑩人工的水分栄養補給のとらえ方

《5. 考察、まとめ》

A さんの夫の感想を多職種で共有し検討した結果、「利用者や家族の気持ちの変化や課題を吸い上げ、それをチームで共有し、メンバー全員で課題を解決したり希望を叶えるための音頭とりをすること」すなわち「連携しやすい良いチームを作り上げること」が介護支援専門員の大切な役割であるという結論に達した。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究(実践)発表を行うにあたり、ご家族に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- ・高齢者を対象とした在宅ターミナルケアにおける介護支援専門員の役割

著者：堂園 裕美,岡田 進一,白澤 政和

<http://life.osaka-cu.ac.jp/publications/magazine/pdf/2007/14.pdf>

(2017 年 4 月 25 日閲覧)

- ・「看取り」に対するケアマネジャーの意識調査結果

在宅看取りのカギは、訪問看護や医師との連携

出典元：ケアマネジメント・オンライン

http://www.caremanagement.jp/?action_enq_user=true&page=cmnr161110#g02

(2017 年 4 月 25 日閲覧)

《8. 提案と発信》

居宅では、看取りの振り返りを行う機会は少ない。遺族の話を聞き、地域の多職種が参加するケース検討会などで看取りを振り返る機会を増やすことが、居宅サービスの質の向上や新たな資源の開発に繋がり、自宅での看取ることができるケースが増えると考え。